



皆さん、はじめまして。 スティーブ神父



フィリピン宣教会のスティーブです。はるばる沖縄からやって来ました。沖縄の那覇教区では8年間、宣教させていただきました。押川司教様に心より感謝の祈りを捧げています。今後は広島教区で三末司教様をはじめ皆様と共に、神様の御国の発展のために宣教させていただきたいと思っております。どうぞ、よろしくお願ひします。

フィリピン宣教会について紹介をいたします。この宣教会は1965年に創立されました。フィリピンは85%がカトリック信徒の国ですので、フィリピン司教団は、これからも国の司祭、宣教師を海外に派遣すべきです。その時フィリピンの国はキリスト信者の国になってから400歳を迎え、祝いました。大きな記念祭でした。その結果、この「フィリピン宣教会」は400記念日に想いを馳せて、フィリピンのセブという島で創立されました。

現在のフィリピン宣教会の司祭たちの人数は、約100人です。フィリピン司教団にとって、この宣教会の目的はまず、アジア大陸に対する福音を宣言しなければなりません。時代の流れに応じてこの宣教会はヨーロッパ、南米、アメリカの国も宣教しています。

フィリピン宣教会が日本に来たのは1991年で、2人の司祭が派遣されました。その2人の内、私だけが残っています。後に新しい司祭が派遣され、那覇教区と京都教区

で宣教しています。現在、日本には、フィリピン宣教会からの司祭が7人いますが、広島教区では私一人しかいません。

お祈りで助けて下さいませ。神様のために、忠実に主イエス・キリストのみ言葉を伝えることができますように、皆様がたのお祈りが必要だと思います。

私の仕事は協力司祭として幟町の信徒の皆様のためだけではなく、移民・移住者のためにも仕事をしています。毎週日曜日、外国人のために英語のミサを行います。その中にはフィリピン人が多いですが、私の仕事は国籍に関係なくすべての人のために働くことです。

カトリック教会は全世界のための教会ですので、南米から来た信者、アメリカやヨーロッパ、アフリカなどの国みんな、どなたでも教会の一員です。彼らのためにも私はここにいます。祈りや助けが必要であれば、私はここにいます。

昔の宣教師の仕事は、未信者の人々のために福音を宣教したり、洗礼を授けたりしました。しかし今は信者になりたいという人はあまりいません。

日本に来てから、私の手で洗礼を受けた信者は、毎年一人しかいません。地元の司祭たちでさえも、あまり沢山の洗礼志願者がいません。

宣教師としての大きな役目は、やはり証することです。主の存在を日々の生活の中

で表すことです。人々に洗礼を授けるのは私の権威ではありません。神様の仕事です。私はただの道具です。

宣教師としての私の仕事は、「霊的」のために助けるためにここにいます。移民や移住者たちの信者の安心な逃れ場はカトリック教会ですね。是非信者の皆さんも、それぞれの国から来た信者たちのために兄弟姉妹としての交わり、キリスト者として広い心を開きましょう。移住者の皆さんを受け入れましょう。

現代の人々は、キリスト的な信仰を得ません。つまり信仰が浅くなったり、弱くなったり、教会の事をあまり大切にしません。

日本のたくさんの信者は教会に来ません。たくさんの信者は教会の日曜日のミサに現

れません。この人々のためにも新しい宣教活動をするべきです。

価値のある宣教師は自分の信仰の大切さ、特に命の尊さを日々の生活の中で証する人です。つまり信仰を日々の生活の中で活かせることです。

どうぞ広島の皆さん、神様のために三位一体のために我々はひとつになりますように。この教会から正義と平和を、世界の人々のために送ることが出来ますように日々祈りましょう。幟町教会は「世界平和記念聖堂」のために捧げています。平和と一致のためにこの教会が世界のいたるところに届きますように願っています。

よろしくお願ひします

2010年度役員が決められました

幹
事
長
就
任
に
あ
た
っ
て

このたび幹事長に選任されました、北ブロック代表の信徒です。前任者の後任の打診があったときには、正直、私のような教会歴の短い者がそのような任を担うことについて「本当に良いのだろうか」とも思いましたが、きっとこれも神様がお望みのことなのだとして理解して、教会の先輩のみなさんにご指導いただきながら、精一杯頑張る所存です。どうぞ今後とも宜しくお願ひ致します。



「被爆の追憶は被曝の恐れにつながる」

YY

あまり触れたくない思い出を掘り起こさせる夏がまためぐってきた。あと何回8月と向きあうのだろう。惨禍から生き残った者の責務として、万感の一端でもと、つたない語りを限られた字数の中で記すことにする。

一昨年『平和の鐘』8月号に「奪われた青春」と題して寄稿し、1945年8月6日、建物疎開作業に動員された12～13歳の少女たちを引率して被爆死された、ソフィア光本幸子さんのことを報告した。その後友人から、ラジオ深夜便で、光本先生が県女に赴任される前の女学校での教え子だったイナゲツネコさんという方のお姉さんの手紙が朗読されているのを偶然耳にしたと電話があった。「妹から7月30日付で『私はやっとカトリックの洗礼を受ける決心ができました』という便りが8月3日に届き、その妹は6日に被爆死した」という内容だったと。キリスト教徒は非国民扱いされ、特高警察によって私生活まで厳しく監視されていた戦時下であった。

教会事務所で洗礼台帳（チースリク神父様が原爆の火災から守って下さった）を調べて下さった。当時主任だったクラインゾルゲ神父様のサインで、「1945年8月5日 Inage 代母 ソフィア光本幸子」と記されている。私が最初に光本さんのことを知ったのは、6年前の広島平和記念資料館企画展「動員学徒一失われた子どもたちの明日」だった。ガラスケースの中に、10センチ四方の薬包紙に鉛筆で書かれた“遺書”。「申

しわけありませんが、私の葬式はカトリックで」の文字に吸い寄せられた。調べるうちに書きつくせないほどの情報を入手することになった…。若くして無念の死を余儀無くされた方たちの、よび声とも思える。

人類の上に、再びあってはならない被爆の悲劇。核廃絶の声は高まっている。けれども今、ひたひたと迫ってくる被曝の恐怖。Co2削減といううたい文句（実際にはそうでないようだ）で原子力発電という「自然界の文化とはなじまない、ある意味では極めて野蛮な文明を発達させた」（高木仁三郎氏）現在の社会で、その“恩恵”を平然と受けている私たちである。原発の本当の“しくみ”と現状は知るほどに恐ろしい。未来には被曝のリスクを遺さないで！とは、一被爆者の心からなる願いである。

受洗おめでとうございます

6月13日、幹事長の3人のお子様を受洗され聖家族となりました。

おめでとうございます。

編集後記



今年も梅雨がやってきた。妙に蒸し暑かったり、時には肌寒い日があったりと、お天道様に翻弄される日々。このような悪環境の中、黙々と教会のお世話を下さっている方々が居られる。愚痴も言わず、虚勢を張ることも無く、ただ黙々と教会共同体のために奉仕いただいている。

私達はその背中を見ながら今日も気持ちの良い教会を満喫させて頂いている。・・・感謝！（の）